平成25年度　第3回　医療福祉機器研究交流会　（2014/2/20）

「高齢社会における長寿社会のまちづくり　」

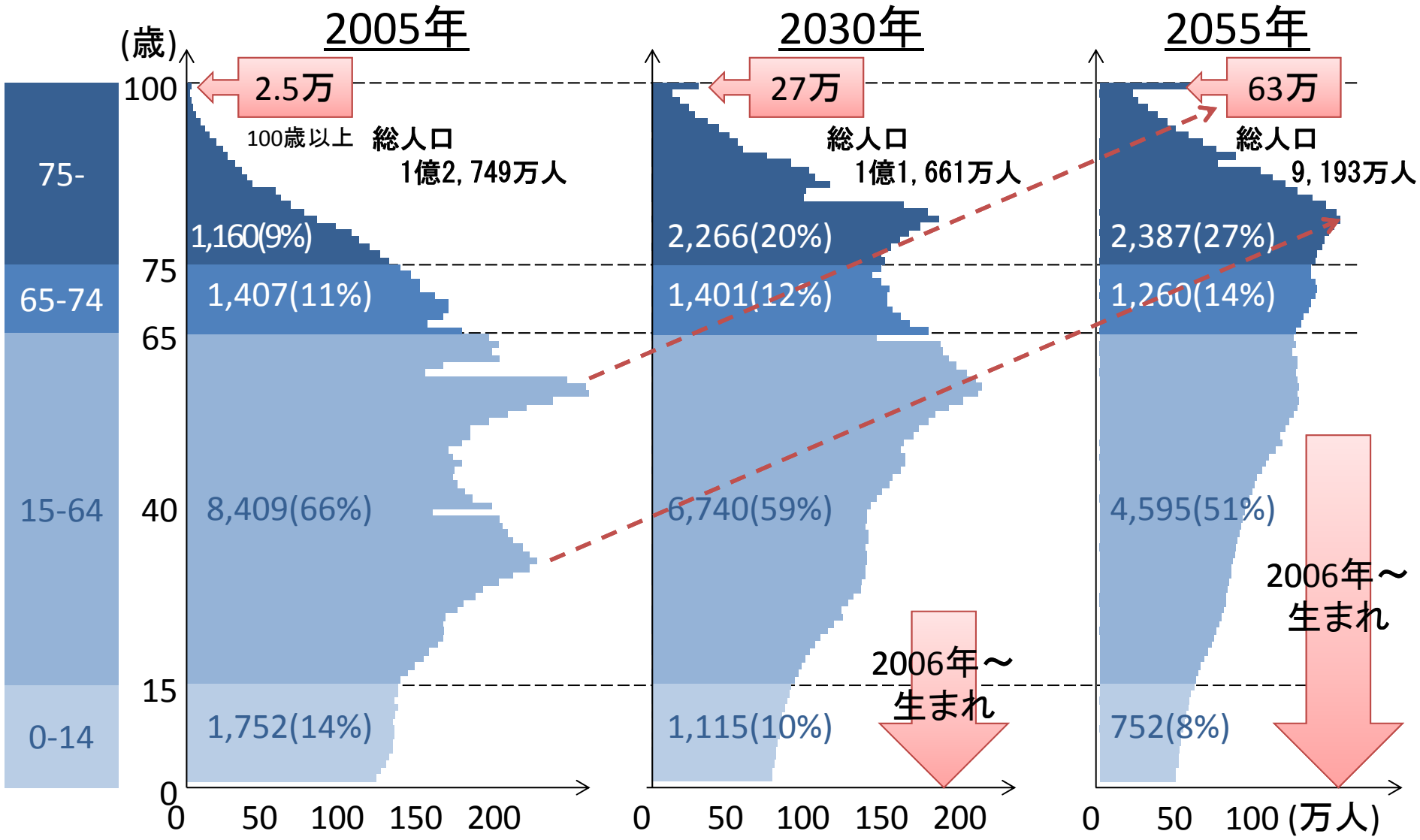
加速する高齢化の中で「治し、支える医療」とは：～『Aging in　Place』を目指した20年後の未来予想図～

東京大学　高齢社会総合研究機構

（ジェロントロジー：老年学）

飯島　勝矢

人口ピラミッドの変化（平成18年中位推計）



資料：2005年は国勢調査結果より。総人口には年齢不詳人口を含むため、年齢階級別人口の合計と一致しない。
2030年、2055年は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果

日本の高齢化を取り巻く課題＜その1＞

◆都市部を中心とした高齢者人口の増加

・2025年には団塊の世代が75歳以上に到達

・多死時代 （現在約100万人→2015年140万人、2025年160万人）

・医療＆介護：双方のニーズの増加 （要介護者も3倍に増加）

・これまでの地方圏の対応の延長は無理

・要介護（要支援）にならない予防やリハビリの重要性

◆都市部で急増する認知症高齢者

2002年：149万人 ⇒ 2025年：323万人（倍増）

※65歳以上人口のうち、6.3% ⇒ 9.3%へ

・早期発見/対応からケアまで地域でのケア体制推進

・在宅ケアの概念の見直し

日本の高齢化を取り巻く課題＜その2＞

◆高齢者一人暮らし･夫婦のみ世帯の増加

・2025年には高齢世帯が約1900万世帯　⇒うち単独･夫婦のみ7割

・家族の介護力の低下、地域コミュニティの脆弱化

⇒保険サービスのみならず、互助サービスを強化必要

・高齢者の住まいの確保

⇒『医療＋介護＋見守り等生活支援サービス＋住まい（方）』

⇒社会的なイノベーションが必要　（生活圏域で用意）

◆今まで以上の地域連携の底上げ

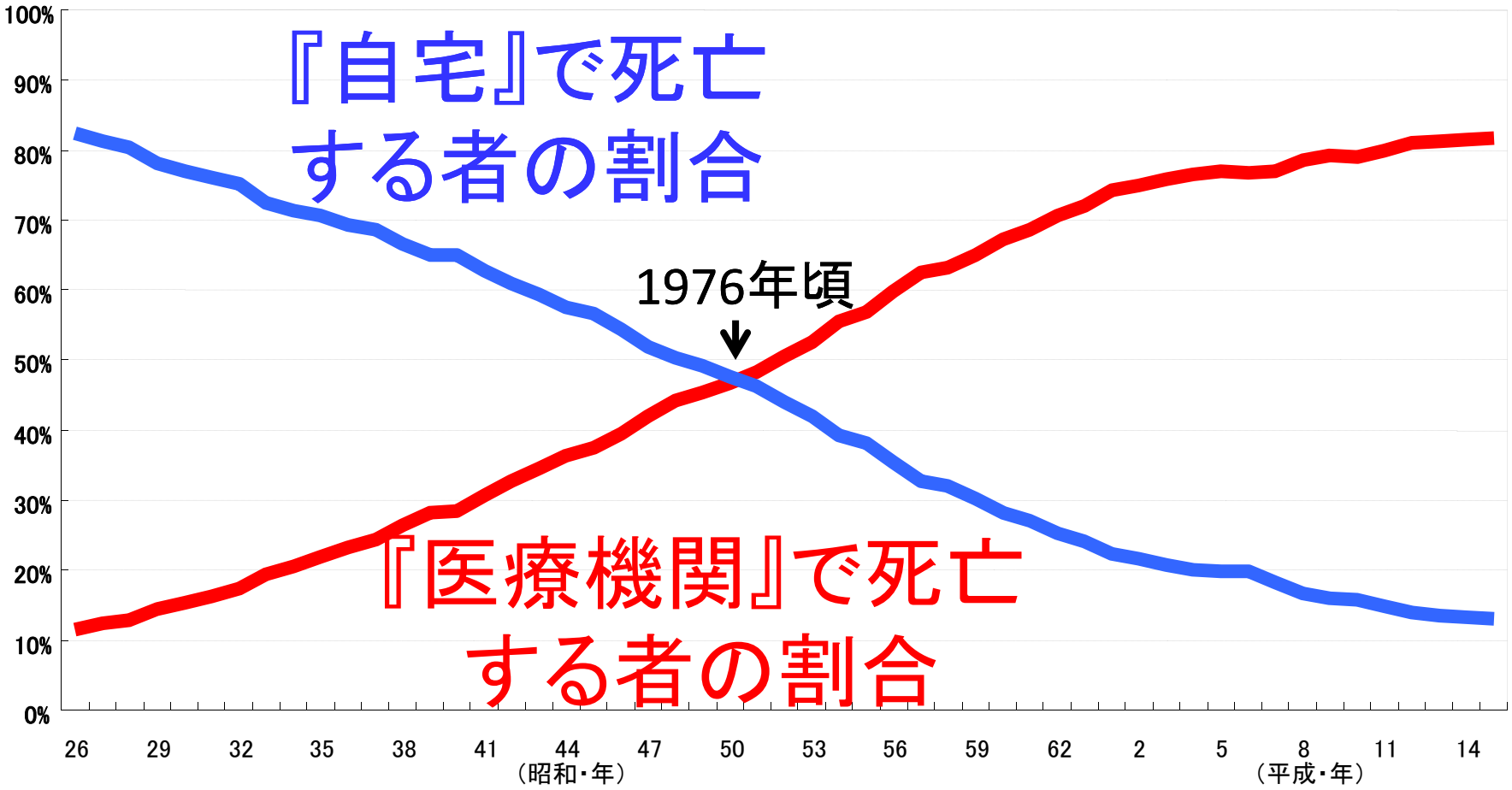
◆良質な介護従事者の確保

（現在労働力人口の1.7%　⇒　2025年3.4～4.4%）

・介護サービスの質向上：　処遇向上と人材確保

医療機関における死亡割合の年次推移

・ 医療機関において死亡する者の割合は年々増加しており、昭和51年に自宅で死亡する者の割合を上回り、更に近年では8割を超える水準となっている。



資料:「人口動態統計」(厚生労働省大臣官房統計情報部)

認知症：家族の置かれている状況

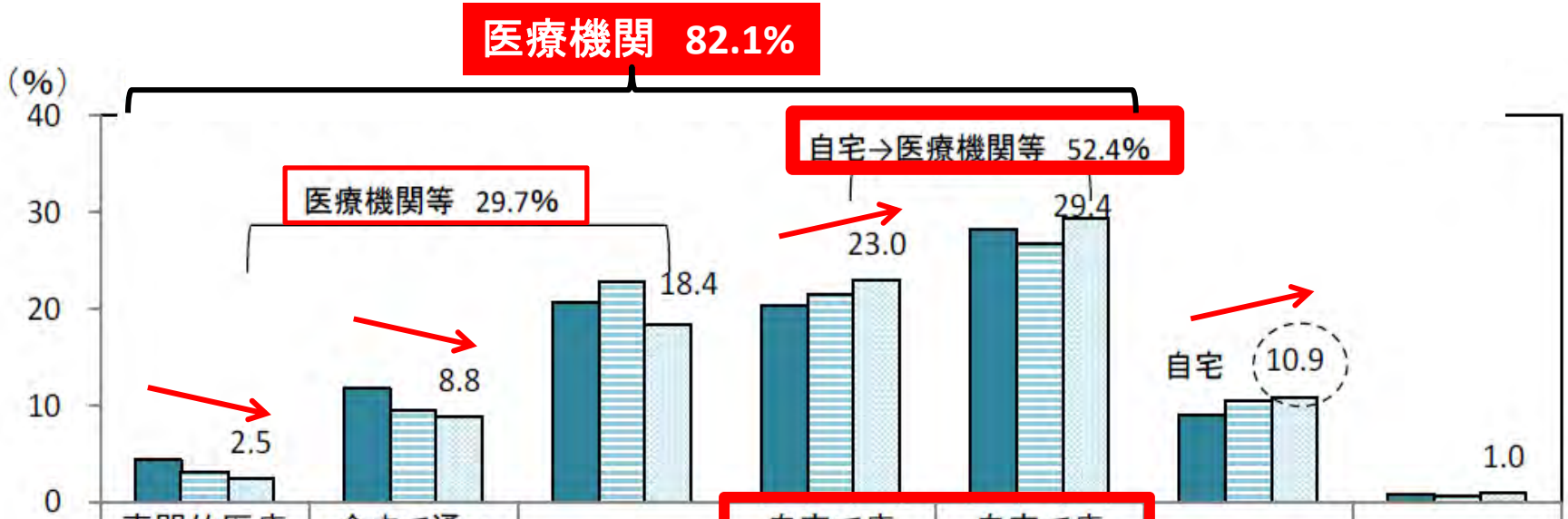
- 生活のしづらさが増えた：9割以上、優しくできない自分への嫌悪感：8割以上、　（認知症の人と家族の会　調査　2012）
- 介護者の状況
  - 介護の疲れ：かなり　31.7%　感じている47.4%
  - 将来介護がさらに負担になる不安は：かなりある43.3%,ある　39.9%
  - 介護に疲れ、自殺や心中を考えたことがある　18.0%

（信濃毎日新聞　2010年）

- 認知症介護者の訴える介護負担
  - この先病状の経過がわからないことに不安
  - 自分の自由になる時間がほしい　（荒井由美子）
- 便、尿失禁、夜間不穏、会話の妨害、幻覚、不幸な様子は、家族介護者の負担感に強い相関を示す

（大西丈二ら　老年精神医学雑誌　2003）

終末期のあり方に関する調査【療養の場所】



	専門的医療機関（がんセンターなど）	今まで通った（入院中の）医療機関	緩和ケア病棟に入院	自宅で療養、必要になれば医療機関	自宅で療養、必要になれば緩和ケア病棟	自宅で最期まで療養	老人ホームに入所
1998年調査	4.4	11.8	20.7	20.4	28.3	9.0	0.9
2003年調査	3.2	9.6	22.9	21.6	26.7	10.5	0.7
2008年調査	2.5	8.8	18.4	23.0	29.4	10.9	1.0

出所「終末期医療のあり方に関する調査」厚生労働省　終末期のあり方に関する懇談会資料（2010年10月）
1998年調査：n=2,422　2003年調査：n=2,581　2008年調査　n=2,527

■1998年調査　▤2003年調査　□2008年調査

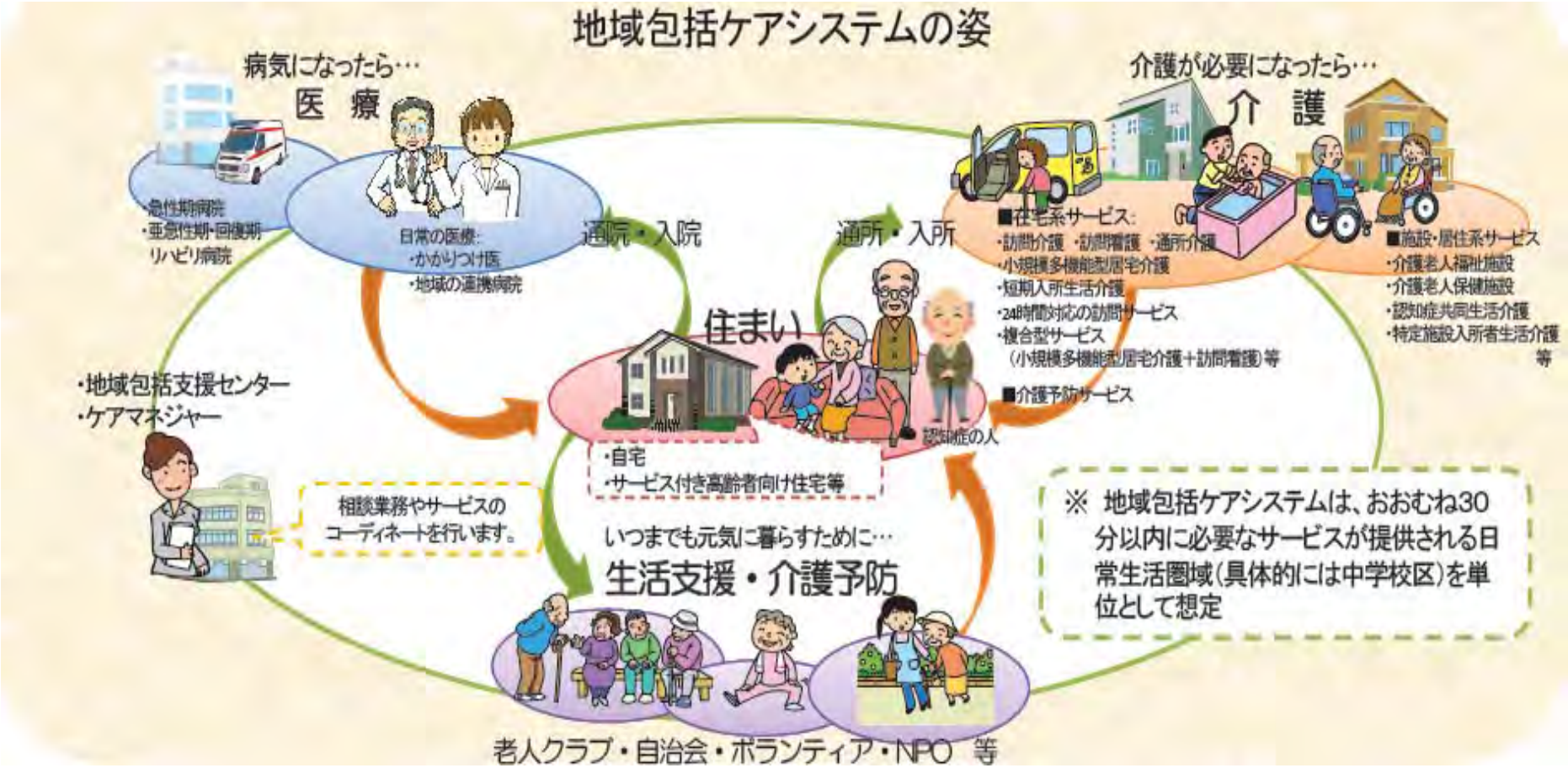
【再考】医療政策が問い直されている

- 医療機能の「機能分化」と「連携」: 現在は合理的か？
  最大の欠落点 ⇒ 在宅医療・ケアの底上げ

- **在宅医療とは何か**
  「医の原点」から考え直す時期に！
  - ☛ 病人である前に『生活者』である
  - ☛ 「治す医療」から『治し、支える医療』へ
  - ☛ 「老いるまち」、「老いる親」、「老いる自分」
    どう考えるのか？ どのように備えるのか？

地域包括ケアシステム

- 「住まい・医療・介護・予防・生活支援」が一体的に提供される
- 地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて構築



地域包括ケアシステム

生活者であり続けるために

「医療が生活の場」に及ばなければ

成立しない

まち（地域）全体で生から死まで支え、

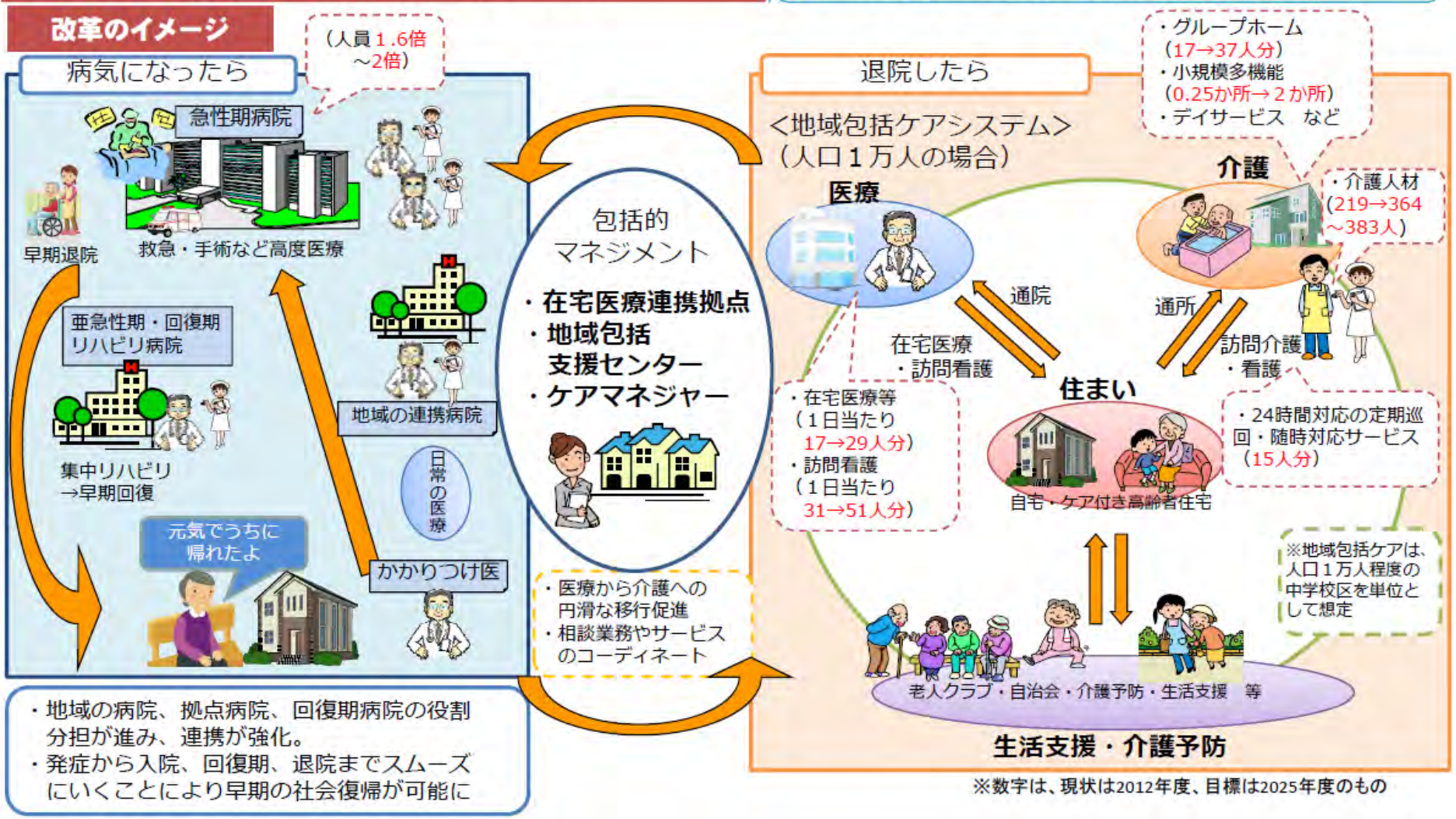
みて（診て・看る）いく

＝『地域完結型の医療への進化』

医療・介護サービス保障の強化
～地域包括ケアシステム～

■ 病床機能に応じた医療資源の投入による入院医療強化
■ 在宅医療の充実、地域包括ケアシステムの構築

どこに住んでいても、その人にとって適切な医療・介護サービスが受けられる社会へ



・地域の病院、拠点病院、回復期病院の役割分担が進み、連携が強化。
・発症から入院、回復期、退院までスムーズにいくことにより早期の社会復帰が可能に

※数字は、現状は2012年度、目標は2025年度のもの

社会保障制度改革国民会議

【医療の改革】

① 健康の維持増進・疾病の予防・早期発見等の積極的促進、医療従事者、医療施設等の確保及び有効活用等

② 医 養の範

③ 医 う必要 整備）

④ 今

「社 言

事業の

＜想定される主な内容＞

① 主治医・副主治医制などのコーディネートによる「24時間365日での在宅医療・介護提供体制の構築」

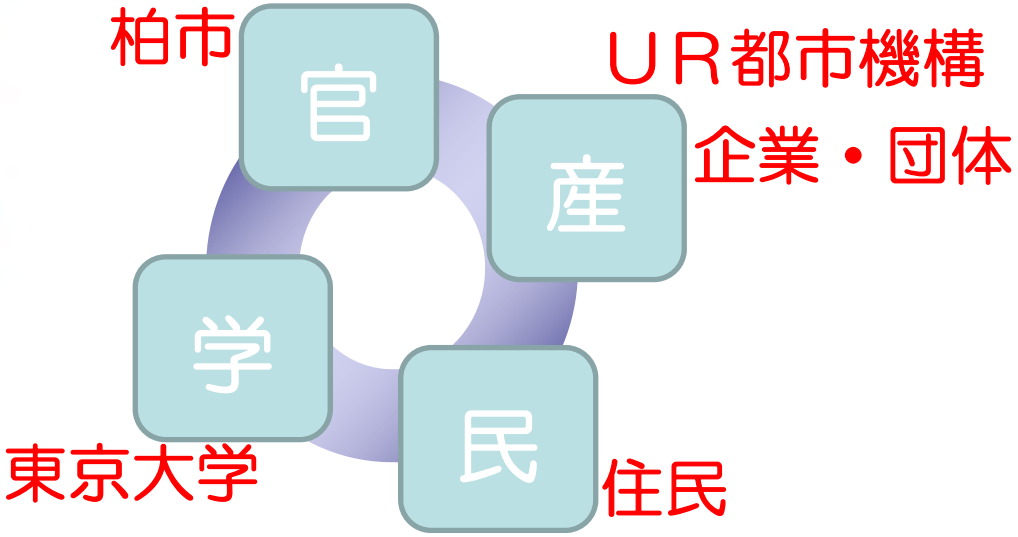
② 在宅医療・介護連携に関する研修の実施

③ 地域の医療・福祉資源の把握および活用　　など

＜ポイント＞

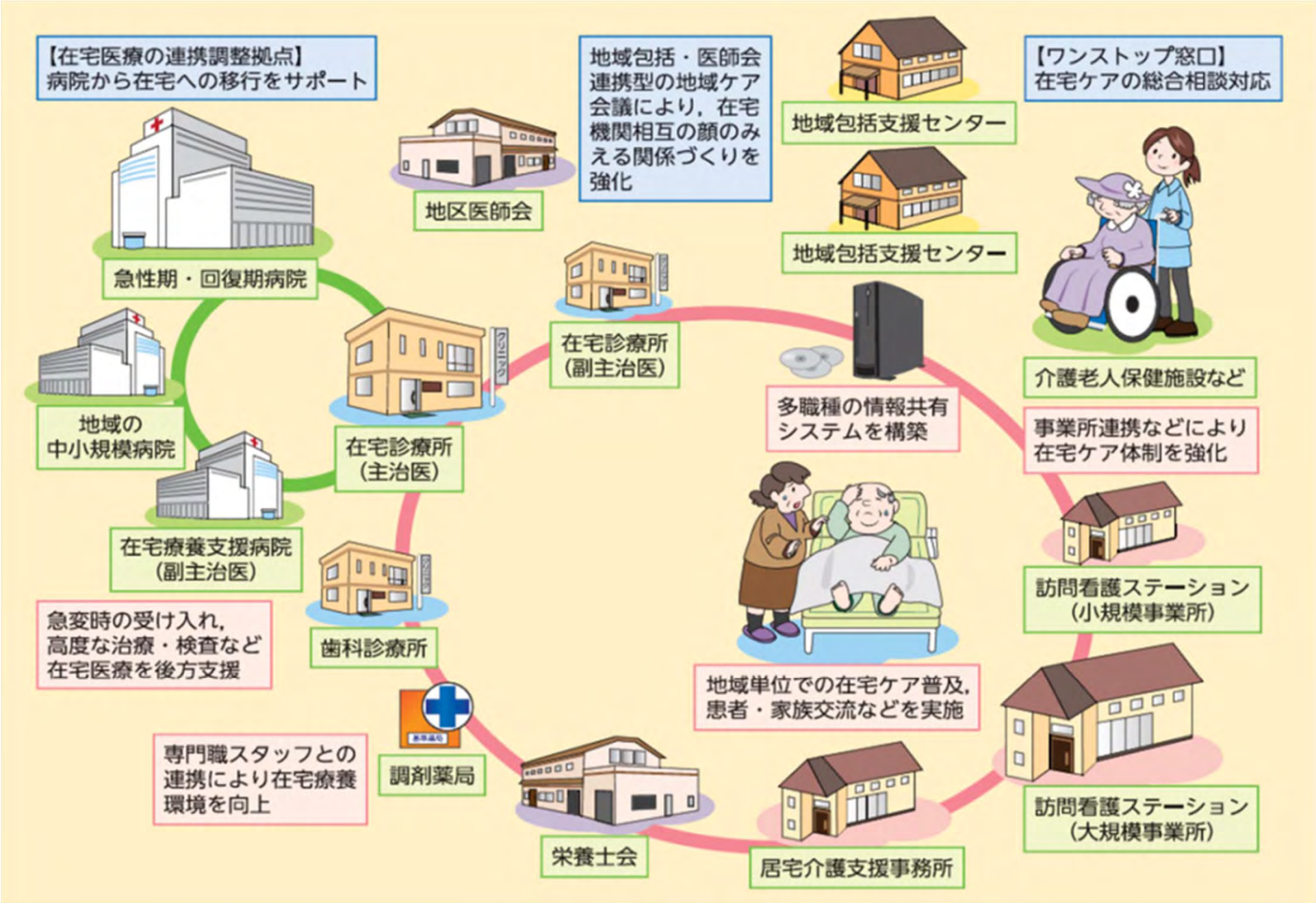
- 緩やかなゲートキーパー機能を備えた「かかりつけ医」の普及
- 事業の実施主体は「市町村」

『千葉県：柏モデル』



産学官民：異分野連携

在宅医療を含む地域包括ケアシステムのイメージ



在宅医療：「点」から「面」への展開へ

①医師の拡大：「かかりつけ医」少なくとも診ている患者は、、

②在宅専門医とかかりつけ医：「協働とグループ化」

③連携を支えるチーム作りの「コーディネート役」

④さらなる連携：　病診、診診、病診看介、連携パス

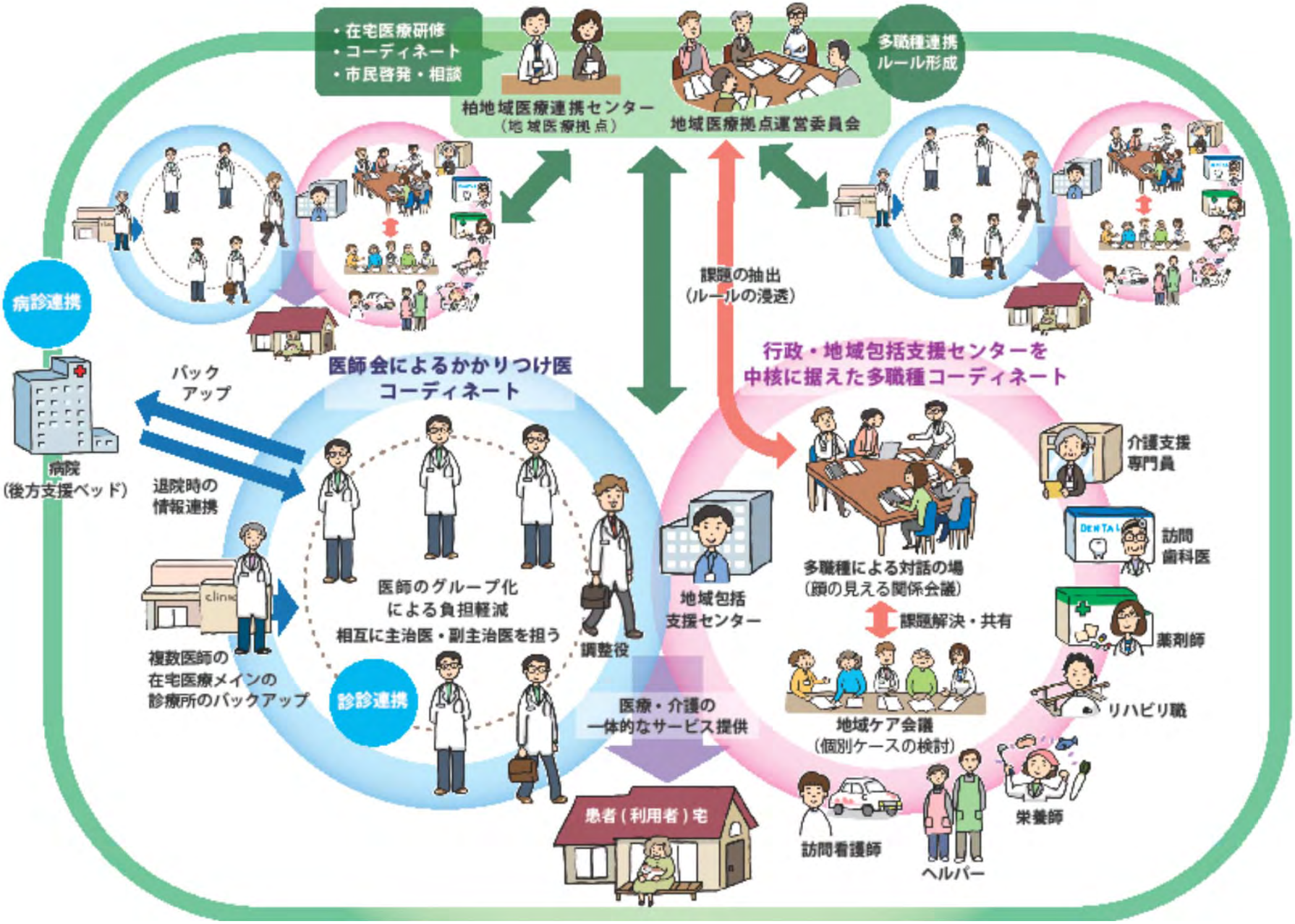
- ☛訪問看護・介護：　人材確保と質向上
- ☛医師は他の職種を活かす

⑤住民の意識啓発：医療福祉の社会資源を上手く使う

⑥そして、地区医師会と市町村行政の二人三脚

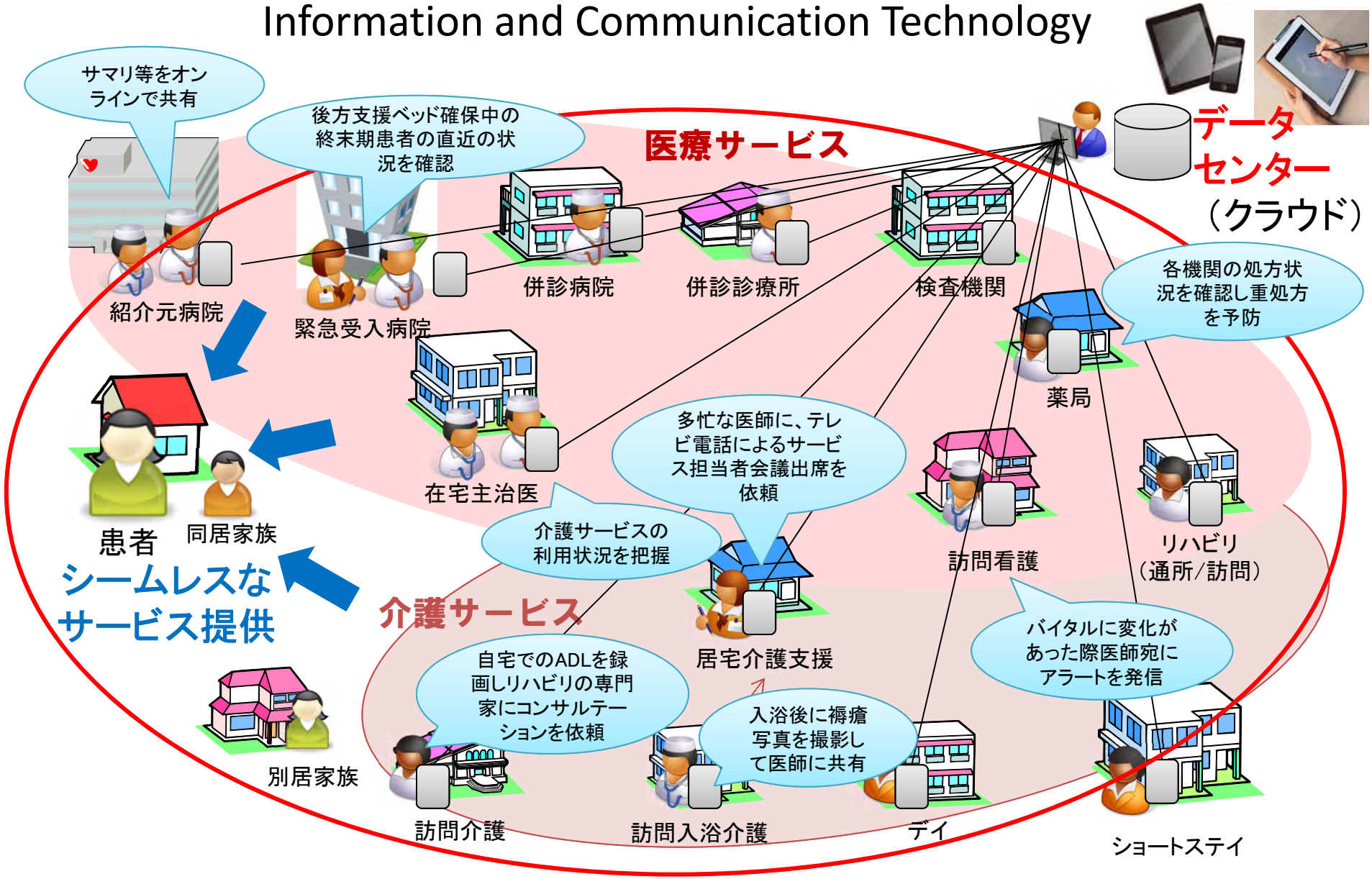
- ☛“地域を療養病棟に見立てる”という意識

地域完結型医療へ：柏PJのイメージ図



情報共有システム（ICT）の活用

Information and Communication Technology



情報共有システムICT：　主な機能

マルチデバイス対応

分析機能

コーディネート
機能

カレンダー
機能

多職種で
共同利用

メッセージ
機能

1対1
連絡

ケアレポート
機能

患者ごとに
関係者間で利用

フェイスシート
機能

薬手帳
機能

カメラ機能を使って写真共有

ビデオ機能を使って映像共有

音声入力機能を使って文字入力

GPS機能を使ってルート検索

タブレット

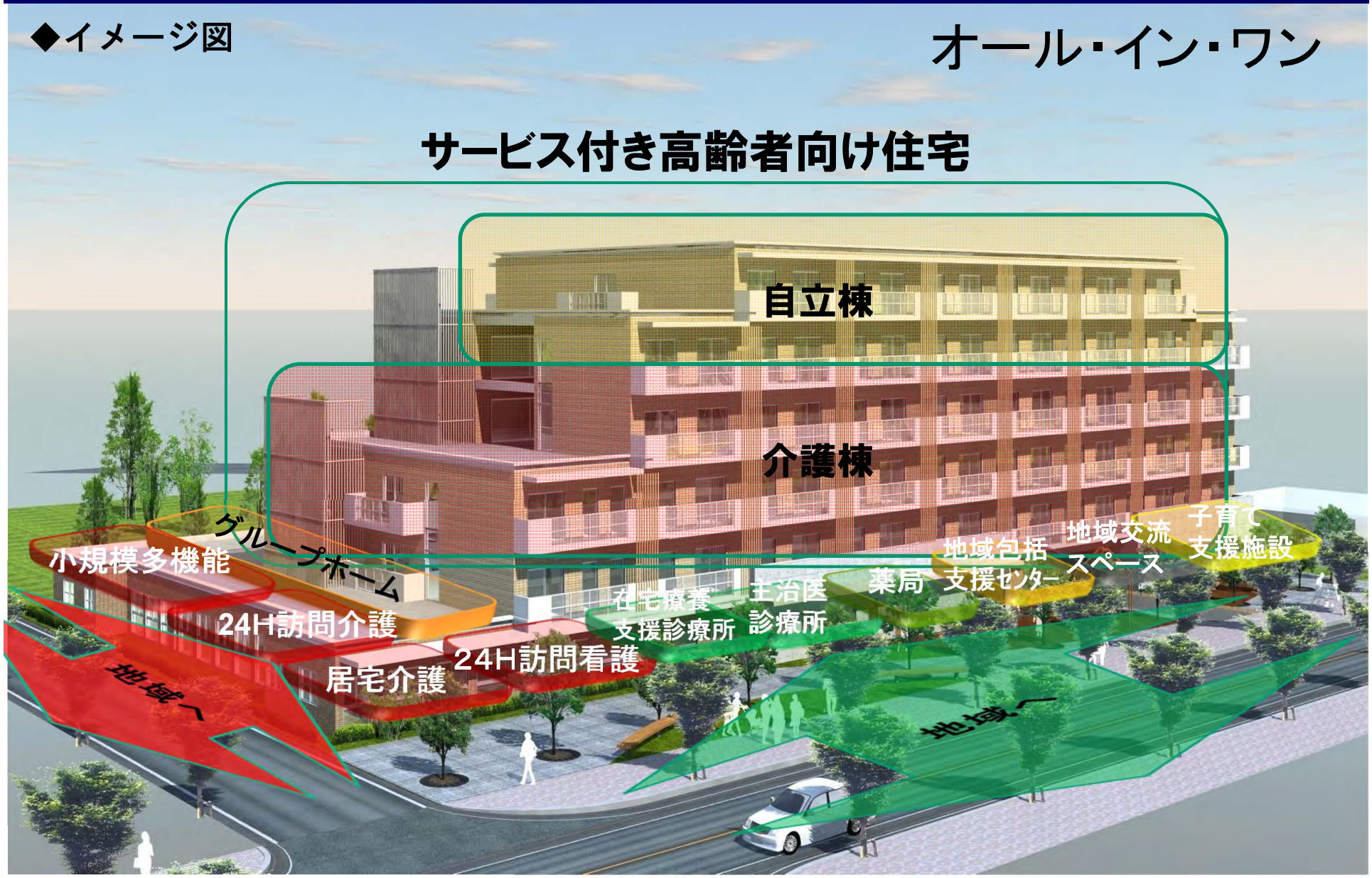
スマートフォン

パソコン

「住宅政策」との連携：今後の課題

◆イメージ図

オール・イン・ワン



※本図は、実施設計前のイメージであり、完成後の建物とは異なる場合があります。

提供：株式会社学研ココファン

『教育』も

もう一つ忘れては
ならないもの

段階的教育
多面的教育・啓発

『在宅医療＆ケア』 住民と一緒に学ぶ場

在宅ケア出前講座

- 公民館などで行われる高齢者サロン
- まちづくり協議会の地域行事
- 民生委員、福祉委員研修会
- 地元医師によるケース発表
  （→DVDの作成）

在宅療養への安心感

さらには

<u>医師の新規参画</u>にも

【在宅医療多職種連携研修】: 構成

1日目

〇午後半日で開催
〇内容
- 在宅医療が必要とされる背景（講義）
- 地域資源マッピング（GW）
- 領域別セッション（講義・GW）
- 懇親会

多職種によるGW

実習
（医師のみ）

〇3時間×2回
〇以下のメニューから選択
- 訪問診療同行
- 訪問看護同行
- ケアマネジャー同行
- 緩和ケア病棟回診

訪問診療同行

2日目
（1日目の1～1.5ヶ月後）

〇終日開催
〇内容
- 在宅医療の導入（講義）
- 多職種連携協働：IPW（講義）
- 領域別セッション（講義・GW）
- 実習振り返り（GW）
- 在宅医療推進の課題とその解決策（GW）
- 制度・報酬（講義）
- 修了証書授与

受講者一同による集合写真

© Institute of Gerontology, the University of Tokyo All Rights Reserved.

【さいごに】団塊世代が75歳以上に:『あと10年』
～今こそ、安心ある在宅療養へ～

①再考:「暮らし方、過ごし方、老い方・死に方」

☛心を委ねた医療人・介護人が横に寄り添うべき

②まちづくりの方針を明確に: 「ご当地在宅」

☛現状と将来の見通し

③区行政と関係団体(特に地区医師会)の連携

☛市町村長と地区医師会長の握手から

④多職種連携＝まさに『地域力』が試されている

☛顔の見える関係、そして情報共有システム(ICT)も活用

⑤地域住民への説明と参加: 一緒に考える場

☛これが「まちぐるみ」となっている秘訣打ち出す